矢板 希望の星

「地域活性化とは後継者づくりである」と言った人がいる。

たしかに、後継者がいる地域は元気だ。夢と希望にあふれている。後継者のいる事業所も元気だ。商業しかり、農業しかり。

高齢社会が進み、ますます、後継者の存在が、あらゆる分野での活性化のキーポイントになってきている。

新年号から、かわら版に、矢板の希望の星・発掘応援メディアという一翼を担わせ、六回ほどの連載で、さまざまな分野で動き始めている後継者の方にお話を伺う。

伝統の酒蔵を継ぐ

これまでの富美川ブランドを確固たるものにしたい

富川真梨子さん

宇都宮白楊高校食品科学科から東京農大短期大学・醸造学科へ。その後バイオビジネス科に編入しマネジメント、マーケティングなど経営を学ぶ。卒業後、水戸の明利酒類で二年間修行。

■父親の死がきっかけだった

幼い頃から酒造りの現場を見てきた真梨子さんが跡を継ごうと決めたのは、父親の死がきっかけだった。彼女には姉がいるが、跡は継がないだろう、だったら自分が富川酒造店を守ろうと決心。学校も酒造りの専門的な学科を選んだ。

現在、清酒業界は低迷している。県内でも年々廃業していく蔵があるという。そのような厳しい環境のもとで、自分のやり方が通用するのか…。不安が彼女を襲う。が、彼女はこう考えている。「跡を継いでこのまま酒蔵を続けるのであれば、一から作りあげていきたい」

とはいっても、矢板に戻ってきてまだ三年。今は、富川の味を継承すること、越後杜氏が培ってきた新潟仕込みの味の作りを覚えることに専念しようと心に決めている。

将来的にはどうしたいのか?という質問に対しては、「自分の味を見つけたいです。そして『富美川』といったら『矢板の酒だな』とたくさんの人に思ってもらいたいですね」と笑顔を見せた。

■「富美川」ブランドを確立したい

多くの人に認知されるには、「コンセプト」が必要である。たとえば、世界最大の酒類コンテストで世界一を受賞した宇都宮の「澤姫」は「すべて栃木県産のものを使う」というコンセプトだ。おいしいだけでは生き残るのが難しい現実の中、真梨子さんも富川のコンセプトを探っている。

ご存知の方も多いかと思うが富川酒造店のもともとのブランドは「忠愛」だ。しかし、この名前は戦時中の「忠君愛国」に由来する。そのため「富美川」で統一し、新しいブランドとして確立させていきたいという。その方法のひとつとして、複数に渡っている商品のラインアップを整理し、より「富美川」のブランドを強く打ち出していこうとしている。こういった戦略的なことは、昨年結婚されたばかりのご主人と一緒に考えていく。修業先の茨城県の蔵元で営業を担当していたこともあり、心強い味方だ。

■親との意見の食い違い

「家業を継ぐときには、継がせる立場の親と継ぐ立場の子どもの間にさまざまな確執があるのでは?」という意地悪な質問に、「親とのぶつかり合いはしょっちゅうですね。でも、若手の同業者と話してみて、親のやり方は変えられないから、とりあえずやって覚える。そして自分たちでやり始める時が来るまでは、やるべきことを覚え、これから先のことに備えていくつもりです」と、すでに覚悟はできている様子。

酒造りの中で真梨子さんが心がけていることは「弱音を吐かない」こと。一回休んでしまうと体がそれを覚えてしまうのだ。そんな過酷な酒造りの合間に、地元の友人とカラオケに行くのが唯一の息抜きだという。

■全国的に有名な栃木の酒蔵

栃木の酒蔵は全国的に有名だ。酒の品質はもちろんだが、後継者も多く、交流する機会も多い。また、下野杜氏という資格があるのも栃木ならでは。女性の下野杜氏第一号を目指しますかと水を向けたら、「もうすでにいらっしゃいます。私は、杜氏の資格を取ることを目的にするのではなく、うちのお酒を造りながら技術を磨いていくことが杜氏への道だと考えています。」ときっぱり。

取材を通して思ったことは、今は仕事を覚えるのが最優先なんだなということ。でも、どんな職業でも同じだ。覚える時期が必ずある。これを乗り越えたとき、矢板には「富美川」という強いブランドが生まれるのではないかと思う。

写真を撮るとき、「暖房でほっぺが赤くなっていますよね…」とはにかんだ笑顔が印象的だった。

（K&O）

ご協力ありがとうございました

24号で紹介したボランティアグループ「安沢ほほえみ会」の募金活動。

十月中旬、計五百個の湯たんぽを気仙沼へ届け大変喜んでいただきました。ご協力・ご支援を下さった方々に大変感謝しております。

今春も支援のツアーを予定。冬物衣類や日用必需品・大工道具等を持っていきたいと考えています。

ひとりでも多くの方の参加を呼びかけています。